



写真 5 バオバブの内樹皮で作る酒を絞る道具（左）とハンティングネット（右）

開校し、子どもたちの多くが進学できるようになったことにより、多くの世帯で多額の学費が必要になっている。このような現状の中、今後、村にはますます畑が増えていくかもしれない。しかし、たとえどんなに換金作物を栽培するようになったとしても、どんなに新しいものがたくさん入ってきたとしても、「木の人」が「あたりまえ」にしている植物との関係を壊す日が来るとは私には思えない。今後、かれらの社会がどのように変化したとしても、自分たちは「木の人」だと自

信をもって誇り続けられるかれらでいて欲しい。

『『木の人』はカッコいい。』私は声を大にしてかれらに伝えていきたい。

本稿は、筆者が所属するNPO法人アフリック・アフリカのホームページに掲載したエッセイを、大幅に加筆、修正したものである。

#### 引用文献

Ten Raa, E. 1966. Geographical Names in South-Eastern Sandawe, *Journal of African Languages* 5: 175-207.

---

## 森の声と村の音

片岡美和\*

「夜が明けるよ」夜明けを告げる鳥の声で目が覚める。「はいはい」調査に行く時間だ。家のお母さんはもう起きていて、お湯

を沸かし、米を炊く準備をしている。熱帯といっても標高 800m にある村の朝は冷える。薪の火で暖まりながら、甘いコーヒーと揚げ

バナナをお腹に入れたら、調査に出発だ。

私はインドネシア西ジャワ州の熱帯山地林で、鳥と農業の調査をしている。国立公園に隣接する村で、原生林と集落を行き来しながら、人為的環境と周辺の鳥類相の関係を調べている。調査中に、思いがけない動物との対面に興奮し、人の出会いが身にしみる。それがフィールドの醍醐味だ。

まだ暗い空に家々の煙が立ちのぼる集落から少し歩くと、薄桃色の空、ひんやりした空気、そして起き出した鳥の声の世界に入る。夜が明けると、鳥たちのさえずりがいっそうふくらむ。起き出した鳥は枝にとまり、朝露で濡れた羽をつくろう。身支度がすんだ鳥が餌を探しに出かけると、しばらく静かになる。

イスラム教を信仰している住民たちの村では、特に金曜日の朝が静かだ。そんな時は、本当に時間が止まって、その場所にひとり取り残されたのではないかと思う。乾期の終わりに咲く真っ赤な花が、明るくなりかけた空に浮かんでいた。

村の周りの二次林では、暗いうちからサトウヤシの樹液を取っていた顔見知りのおじさんたちに出会う。「おはようさん、今日も早いね。」二次林でみられる鳥を記録していると、山に行くおじさんたちに追い抜かれる。「お先に」「おじさん今日はどこへいくの？」焼畑へ、薪を集めに、狩猟に、答えはさまざままで、いつも犬を連れている。

棚田の脇に建てられた小屋に住んでいる老

人がいる。早朝に集めたサトウヤシの樹液を、もう煮詰めている。彼の歌う民謡は、樹液の甘い香りと一緒になって、あたたかくなり始めた空気にゆらめく。

顔見知りの人や鳥に出会う二次林に比べて、村から遠ざかった原生林の中は静かだ。原生林では、二次林ほど頻繁にそして間近に、鳥や動物に出会うことはない。森には、動物の隠れ場所となる樹冠や下層植生が豊富で、鳥の餌場も限られていないため、遭遇率が低い。

原生林の静けさには二種類ある。動物の動きには、鳥や哺乳類に限らず一定の流れがあるようで、別の場所に餌を探しに行っている場合は静かで、気配さえ感じられない。一方で、静けさの中に、何かが起こりそうな気配を感じる場合がある。何かが起こる気配を秘めた「しーん」という音を感じるとゾクッ、鳥肌が立つ。そしてワクワクする。

鳥を探す時は、耳を澄まし、全身の感覚から「音」と「音の気配」をたぐる。何度も決まった場所に通っていると、鳥が出てくる順番と場所はだいたい予想がつくが、時折予想しない瞬間が訪れる。その予兆が「音の気配」だ。

遠くから、鳥と動物のざわめきを感じた。「やった！ついでる！」

気配を感じたら、鳥の通り道を予測し、間合いに気をつけ、息をひそめて待たねばならない。この一瞬を逃したら、次はいつ会えるかわからない。そんな私の緊張感を知って

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 家族の一日を支えるかまど

か、知らずか、鳥の混群がやってきた。一番手に飛ぶ鳥、その鳥に続いて葉の中をつつきまわす鳥、前の鳥の落とした昆虫を拾う鳥、緑の樹冠に、色とりどりの羽と鳴き声が踊る。見とれている暇はない。一度に十種類前後、何十羽もの鳥が通る、その瞬間にメンバーの種類と行動を書き留める。鳥と出会うかどうかの勝負は午前中に決まるので、帰り道は比較的楽だ。正午近くの森には、セミの声だけが響く。

「トントントントン…」お母さんたちがコメについて脱穀している音が聞こえ始めると、村が見えた。朝飯を食べていない私はもう、ふらふらだ。

道にいきなり、牛に乗った少年と牛5頭が、二次林から飛び出した。一瞬だった。つむじ風のように私を置き去りにして、ケラケラ笑い声とともに斜面の下に消えた。破れたズボンはいた小さい子どもが、あとからつけてけと走る。驚いて吹き出す。微笑ましい光景と、少年のつむじ風で、疲れが軽くなった。

家に着くといつもご飯が用意してある。つ



写真2 サトウヤシの樹液を夜明けと夕暮れの2回集める

いさっきまで、鳥の声に耳を澄ませ、風で木々が揺れる音に驚いたりしながら、動物と植物と風の世界にいたのが嘘のように、ひんやりした家の中でご飯に夢中になる。

「森をひとりで歩いて怖くないのか」と聞かれるたびに、「怖くないよ、悪い人間に会う方が怖いよ」と答えて笑われる。本当は、森の奥にひとりぼっちでいると、怖くなる時がある。

そんな時に私を勇気づけてくれるのは、鳥や動物との遭遇と、計りしれぬ村の人びとの気づかいなのだ。

森に入り、自然と一体になれるとき、ジャワテナガザル、サイチョウやヤマネコといった人間の気配に敏感な動物を、間近で見ることができる。初めての調査の時、最後の調査の時、落ち込んでいる時、不思議なことに、その瞬間は突然、ご褒美のように与えられる。「ひとりじゃないよ」「またおいで」と語りかける森の声に励まされる。

滞在先の家族は、「今日はどのルートに行くのか」「風が強くなったら無理をせずに帰って来なさい」と気にかけてくれ、棚田や畑で働く住民は「休憩していきなよー」と声をかけてくれる。ひとりで調査が続けられるのは、初めての調査の時以来、私を受け入れ、家で心配してくれているお母さんやお父さんがいればこそだ。

調査を始めてから3年のうちに、景観が大きく変わった村もあれば、あまり変わらな

い村もあった。目に見える変化のスピードはそれぞれであるが、その速度は予想よりも早い。今度行った時に、またいつもの光景や、顔なじみの人たちに会えるだろうか。私を迎えてくれる動物たちは健在だろうか。森は私に語りかけてくれるだろうか。

目をつぶって耳を澄ませば、西ジャワの山奥から森の声と村の音が聞こえてくる。

---

## 移動する人々との関わりから生まれた「故郷」

伊 藤 千 尋\*

ザンビアの農村で調査をしながら暮らしていたとき、私は有名人になった気分だった。どこを歩いていても、近くから、遠くから私の名前を呼ぶ声がしてその先には村の人々が笑顔で手を振っている。

私が初めて調査村（ハバンバ村）に来たのは、まだ乾季で気温が穏やかな8月下旬だった。ザンビア南部州、国内でも干ばつが頻繁におこる地域として知られているところだ。私は農村の人々が生業をどのように組み合わせているか、そして特に出稼ぎ労働が村の人々の生活、とりわけ経済にどのような影響を与えているかを研究のテーマにし村に入った。これはそのときに私の心の中で生まれてきた調査村に対する「故郷」の意識の話だ。

### ハバンバ村との出会い

ハバンバ村の多くの人にとって、私は「初めて見る身近な白人」であった。そのため村に入った当初は、ハバンバ村だけでなく隣村から、私を見ようと色々な人が訪ねてきた。初めのころは、私が歩いていると挨拶や質問の嵐で、現地の言葉を話そうとする私をおもしろがったり、からかったりする人もいた。このときが初めてのアフリカ滞在だった私は、村の人々とのこうしたやりとり、視線に疲れを感じずにはいられなかった。到着して間もない頃は気づかなかったが、村の人々が、初めて見る外国人に不安や好奇心という感情を抱くことは自然のことだった。そのことに気がついてからは心が楽になり、8ヵ月

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科